令和４年度第３回室蘭市総合教育会議

会議録

令和４年度第３回室蘭市総合教育会議　会議録

１　日　時

令和４年１１月１５日（火）

開会　午後６時００分　　閉会　午後６時４０分

２　場　所

室蘭市役所　２階大会議室

３　次　第

１．議　題

（１）室蘭市子ども未来指針（素案）について

４　出席者

青山市長　伊藤教育長　奈良委員　古谷委員　定廣委員

和野総務部長　坂口教育部長　髙田教育指導参事　西舘教育部次長

船橋教育部総務課長補佐　山口学校教育課長　山﨑生涯学習課長

本野学校給食センター所長　椎名指導主事　棟方指導主事

坂口教育部長　　定刻になりましたので、ただいまより令和４年度第３回室蘭市総合教育会議を開会いたします。総合教育会議は、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」に基づき、市長により設置される会議でございまして、市長と教育委員会が意見交換する機会を設けることで、十分な意思疎通を図り、教育施策の方向性を共有しながら、連携して教育行政を推進することを目的としています。

それでは、お手元の次第に従いまして、本日の協議事項に入ります。ここからは、議長を市長に務めていただきます。よろしくお願いいたします。

青山市長　　皆さま、お疲れ様です。よろしくお願いいたします。

本日の協議事項は、「室蘭市子ども未来指針（素案）」についての１つの協議事項となっております。

それでは、「室蘭市子ども未来指針（素案）」について、事務局の説明をお願いします。

髙田教育指導参事　　お手元の資料をご覧下さい。まず表紙をおめくり頂いて、２ページの目次をご覧下さい。

本指針の構成は、「はじめに」、次に「第Ⅰ章　学校教育が抱える課題」、「第Ⅱ章　課題解決に向けた２つの柱と２つの柱の中で行う２つの教育」、「第Ⅲ章　まとめ」となっております。

まず、３ページの「はじめに」をご覧下さい。ここでは、策定までの経緯や本指針の目的などがまとめられております。室蘭市教育委員会は子どもたちの学力伸長を図るために、平成２３年度から令和４年度まで「学力向上基本計画」を策定し、本市教育研究所や小中学校と手をたずさえ、各種の取組を推進してきました。その成果として、学力諸調査の結果からは、徐々に全国との差が縮小傾向にあります。しかしながら、その一方で、「自分にはよいところがあると回答する子どもが少ない。」「ふるさと室蘭に、愛着をもつ子どもが少ない。」「不登校出現率が、全国に比べて高い。」「いじめ発生率は全国と比べて高くはないものの、継続発生している。」ことが、大きな課題となってきました。そのため、有識者な

どによる「これからの学校づくり検討委員会」において、課題の解決方法について半年間に渡る協議がなされ、提言をいただきました。そこでは、小中学校、家庭、地域が「求める１５歳の姿」（各中学校区のスタンダード＝１５歳に向けて、各学年段階で身に付けさせたい力や習慣を示したもの）を共有すること。その実現に向けては、「小中学校が一体となった教育」と「家庭、地域が参画して学校と一体となった教育」を２つの柱とすること。そして、義務教育９年間を通して「ふるさと室蘭に愛着と誇りを持つ教育」「ふるさと室蘭で共に生きる教育」に取り組むことが示されました。これを受けて、学力向上基本計画は終了とし、新たに令和５年度以降の本市学校教育の道標となる「室蘭市子ども未来指針」を策定することにいたりました。本指針の目標は、最終的には教育施策の大綱・教育目標の実現を図ることでありますが、「全ての子どもが楽しいと感じる学校の実現を図ること」も大切にしております。

次に、５ページをご覧下さい。学校教育が抱える４つの課題です。（１）「自分にはよいところがある」と回答する子どもが少ないこと、（２）ふるさと室蘭に、愛着をもつ子どもが少ないこと、（３）不登校出現率が、全国に比べて高いこと、（４）いじめ発生率は、全国と比べ高くはないものの継続発生していることが挙げられます。

次に１枚おめくり頂いて、７ページをご覧下さい。「室蘭市子ども未来指針」では、課題解決と教育目標実現に向けて「２つの柱」を立てております。まず柱１は、小中一体となった教育です。「視点１：求める１５歳の姿の共有」「視点２：ふるさとの魅力ある教育」ものづくりのまちを調べ、体験する学習。ふるさとの歴史・文化・自然を調べ、体験する学習。高等教育（室蘭工業大学）に触れる学習。「視点３：他者との関わり方を学ぶ教育」ご高齢の方との関わり。障がいのある方との関わり。災害発生時などの関わり。「視点４：より質の高い授業と英語教育の充実」ふるさとを英語で語れる中学生の育成。「視点５：いじめは絶対に許されないと思う心の育成」

「視点６：幼保小連携の充実」の６つの視点を掲げております。

続いて柱２は、家庭・地域が参画して学校と一体となった教育です。「視点１：コミュニティ・スクールの充実」「視点２：地域と共に自己有用感を高める」子どもたちを育む基盤は教職員のあたたかな和。学校教育への地域の参画。主体的・対話的で深い学びの授業づくりへの参画。相談体制への参画。見守り体制への参画。地域活動、地域行事への子どもの参加と学校行事への地域の参画。「視点３：家庭と共に各種習慣を身に付ける」早寝早起き、朝ご飯。家庭学習とスマホやゲームの時間。運動習慣、読書習慣の３つの視点を掲げております。

そして、真ん中下の赤い四角にございます通り、これらの２つの柱の中で行う「２つの教育」を実践するために、小・中学校９年間の教育課程に「ふるさと室蘭に愛着と誇りを持つ教育」と「ふるさと室蘭で共に生きる教育」を位置づけまして、室蘭市ならではの教育を行なってまいります。

次に８ページをお開き下さい。ここでは「柱１　小中一体となった教育」について記載しております。

はじめに「視点１：求める１５歳の姿の共有」では、小中学校・家庭・地域が、各中学校区で設定している「求める１５歳の姿」を共有し、一体となってその実現に向けてベクトルをそろえて行動していきます。また、小学校と中学校の教職員の人事交流を推進し、小中双方の理解と課題の解決を図っていきます。

次に「視点２：ふるさとの魅力ある教育」をご覧下さい。教育委員会は、学校・家庭・地域と連携し、子どもたちがふるさとへの理解を深め、「愛着」と「誇り」を持つ魅力ある教育を推進します。「ものづくりのまちを調べ、体験する学習」では、子どもたちが企業や地域の方とふれ合いながら様々な学習を通して、「室蘭ってすごいなぁ。室蘭がますます好きになった。室蘭の人ってやさしいなぁ。大人って室蘭のためにいろいろなことを考えているんだ。」と実感する場面を多くつくるとともに、自分は「将来、人の役に立つ人間になりたい。」「将来、

私は室蘭に住んでがんばりたい、働きたい。」という気持ちを育みます。ここでは、室蘭市の水素や洋上風力発電などのカーボンニュートラルに向けた最先端の取組について学習することも大切にします。「高等教育（室蘭工業大学）に触れる学習」では、中学生は自分の進路選択において、高等学校の説明会やオープンスクールに参加する機会はあります。しかしながら、その先にある高等教育に触れる機会がほとんどありません。室蘭市には、室蘭工業大学という科学技術の先端を研究している大学がありますので、それを見学する機会などを設けることで、義務教育終了後の自分の学びについて、夢や希望、そして見通しを持たせるようにします。

次に「視点３：他者との関わり方を学ぶ教育」です。少子高齢化は、待ったなしです。今の子どもたちが大人になった時、自分の周りには沢山の高齢の方と、生活に困難を抱えている方がいることが想定されます。このようなことからも、様々な他者との関わり方を義務教育段階で学ぶ必要があります。この場合、単に「可哀想」の気持ちを持たせるのではなく、対等の立場で、場面に応じて自分が何ができるのかを考え、行動する力を身に付けることが必要です。また一方で、近い将来、大規模震災の発生が予見されています。その時に備えて、義務教育段階から、防災・減災について学び、事態に応じて自ら適切な判断をし行動する力を身に付けることも必要です。

次に「視点４：より質の高い授業と英語教育の充実」です。小中一体となった教育を進めることで、小中学校教員の協働が一層図られます。専門性の高い中学校の教員が、小学生の教科指導に参画することや、小学校の教員の丁寧な指導を中学校教員が学ぶことで、より質の高い授業の構築が期待できます。また、今の子どもたちが大人になった時、外国人の方と働くことが想定されます。その時のコミュニケーション・ツールは、英語になるはずです。そのためにも、早い段階から、子どもたちの英語を聞く・話す能力を高める必要があります。教育委員会は、英語で行う子どもサミットの開催や英語検定への

積極的な挑戦を促すなどして、「ふるさと室蘭を英語で語れる中学生」の育成を目指します。

次に「視点５：いじめは絶対に許されないと思う心の育成」、最後に「視点６：幼保小連携の充実」となっております。

なお、下の表は、柱１の推進指標と目標値を示しており、小中一体となって取り組んでまいります。

次に１１ページをご覧下さい。「柱２　家庭・地域が参画して学校と一体となった教育」です。

はじめに「視点１：コミュニティ・スクールの充実」です。学校は、家庭・地域とともに「（校区スタンダードによる）目指す１５歳の姿」の実現に向けて協働していきます。良好な関係の中で、お互いに無理がなく持続可能な関係を大切にしながら、それぞれの立場で何ができるかを熟議し行動に移します。教育委員会は、定期的に学校と地域の声を聞くなどして、横断的な支援を行います。また、学校は、地域活動を支えるために、施設や設備を提供することも検討します。例えば、空き教室を開放して、町会の会議場所として活用していただく、体育館やグラウンドを地域行事に開放することなどが考えられます。また、地域の回覧物や会議資料などを、学校のコピー機や印刷機を使用して印刷することも考えられます。

次に「視点２：地域と共に自己有用感を高める」です。子どもたちの教育の基盤となるのは教職員の和です。お互いに目配り、声かけなどの配慮をするとともに、職場内に力の強い先生、力の弱い先生が生まれないようにします。子どもたちや保護者・地域から見て、「先生方は仲がいいな。連携して私たち（子どもたち）を育ててくれている」となるように教職員同士が敬意と配慮をもって接し合い、和を形成することが基盤となります。学校教育への地域の参画では、子どもたちの自己有用感を高めるためには、学校や家庭だけではなく、様々な人との関わりが求められます。これからの学校は、教育活動の中に可能な限り地域の教育力を参画させて、様々な人との関わりの中で、子どもたちの自己有用感を高める取組

が求められます。「主体的・対話的で深い学びの授業づくりへの参画」では、学校は、ツールとしてのＩＣＴと生徒指導の３機能を活かし、主体的・対話的で深い学びの授業づくりを行います。生徒指導の３機能とは、子どもに授業の中で「自己存在感」「共感的な人間関係」「自己決定」の場を与えることです。また、地域の学習ボランティアなどが参画して、支援していただくことが考えられます。加えて、免許を持つ先生がいない教科（例えば、技術科・家庭科・美術科）で、優れた技能を持つ地域の方に実技指導していただくことなども考えられます。「相談体制の参画」では、空き教室などを有効に活用して、可能であれば地域の民生委員や児童委員、保護司の方などの相談室を設けて、子どもが抱える悩みへのアドバイスや、よい行いなどへの賞賛を与えていただくことなどが考えられます。時には、指導に悩む教職員への情報提供や助言も考えられます。「見守り体制への参画」では、すでに、登下校時の子どもの見守り体制は整備されていますが、今後は、休み時間や放課後の子どもたちへの関わりを通して、いじめの芽の早期発見などが考えられます。時には、学校への地域情報の提供なども考えられます。「地域活動、地域行事への子どもの参加と、学校行事への地域の参画」では、学校は、町会や青少年健全育成推進協議会などが主催する地域活動や地域行事への子どもたちの参加と、家庭への周知・協力を積極的に促していきます。ここでは、地域の伝統芸能などの文化の伝承も想定されます。ほかにも、通学路の清掃活動、町会花壇整備、雪かき、避難訓練の合同実施や運動会、学習発表会などへの地域の参画、登下校中のひとり暮らしの高齢者宅の見守りなども考えられます。子どもたちと地域との関わりを深めていく中で、学校や家庭以外の場面で、自分のよさに気づくことを目指します。また、学校を介して家庭と地域とのつながりが深まることで、孤立している家族への支援が期待できます。

次に「視点３：家庭と共に各種習慣を身に付ける」をご覧下さい。教育委員会と学校は、ＰＴＡと連携して、保護者意識の啓発を図り、以下の習慣を子どもたちに身

に付けさせることに取り組みます。まず「早寝早起き、朝ごはん」です。次に「家庭学習とスマホやゲームの時間」では、本市の子どもたちは、全国に比べて朝ごはんを食べる子どもたちが少なく、家庭学習時間が短く、スマホやゲームをする時間が長い傾向があります。次に「運動習慣」です。体力の意義を踏まえると、「運動をするための体力」と、病気にならないための「健康に生活するための体力」があります。教育委員会は、２つの体力の維持向上を図るため、スポーツ施設の整備を図るとともに、市スポーツ協会や各種競技団体などとの連携の中で、スポーツに触れる機会の確保にも努めていきます。次に「読書習慣」です。教育委員会は、ブックスタートなどの乳幼児期から親子で読書に親しむ習慣づくりに取り組むとともに、えみらんなどにおいては、機会や場所を引き続き提供していきます。また、学校の蔵書の充実に努めると共に、図書館司書を派遣するなどして、学校図書館の機能を改善することにも努めていきます。

なお、下の表は、柱２の推進指標、目標値を示しております。

１６ページをご覧下さい。「第Ⅲ章　まとめ」です。教育施策の大綱で掲げる教育目標「一人ひとりが夢を持ち、新たな時代に挑戦する力、生きる力を育む」をご覧下さい。これからの室蘭を担う子どもたちを大切に育てるためには、学校や家庭だけに任せるのではなく、教育委員会、小中学校、家庭、地域がベクトルをそろえ一体となって子どもたちに関わり、支え、育てていくことが求められています。それに向けて、室蘭の小中学校が一体となって義務教育９年間の教育を創り上げ、子どもたちにとって「楽しい学校」を実現しつつ、これからの時代を生き抜くために必要な資質・能力を確実に身につけさせることが求められます。加えて、地域コミュニティの核となる学校づくりも進めることも重要です。家庭・地域の力で、学校教育を補完していただいて、子どもたちの自己有用感の向上を一層図り、学校の抱える課題を解決しなければなりません。併せて、地域が抱える課題の解決に積極的に協力することも求められています。

本指針では、次ページのイメージ図にあるような、学校を介して子ども・家庭・地域の三者が温かな心と絆で結ばれて、子どもたちが「室蘭の学校で学んでよかった。」、保護者が「室蘭の学校で子どもを学ばせてよかった。」、地域の方が「室蘭の学校をこれからも大切に守り育てたい。」、そして、「室蘭に移住し、室蘭で子どもを育てたい。」と言っていただくことを目指しています。

これらのことにより、「一人ひとりが夢を持ち、新たな時代に挑戦する力、生きる力を育む」が実現するものと考え、取組を進めてまいります。

以上で説明を終わります。

青山市長　ありがとうございます。ただいまの事務局の説明に対しまして、皆さまの方からご質問・ご意見等頂きたいと思いますが、いかがでしょうか。

私の方から言わせて頂きたいと思います。非常に読みやすいまとめだったと思います。子どもたちが読んでも理解できるような言葉が多いと感じましたが、例えば中学生くらいが読んでも解るような文章に心がけたなど、何かありますか。

髙田教育指導参事　はい。まずは現場の先生方、子どもたち、保護者の方にも目を通して頂いて、なるべく分かりやすいような表現で工夫してつくっております。

青山市長　子どもたちに実際読んでもらえるような、手にとってもらえるような指針なのかなと率直に思いました。また、７ページの視点２の自己有用感という言葉は、今まで自己肯定感という言葉を良く聞いてきた気がするのですが、自己有用感という言葉があまり聞き慣れなく、その辺りの意味も良いと思いましたが、もう一度教えて頂きたいと思います。

髙田教育指導参事　自己肯定感も自己有用感も、自分には良いところがあると肯定する点では同じになります。しかし自己有用感は、自己肯定感より社会性が加わり、集団や他者との関

わりの中で生まれる肯定的な評価も含んでおります。自分には良いところがあるほかに、集団の中で私は皆の役に立っていることや、僕は皆から必要とされていることなど、自己価値を感じて自らの存在を受け入れる自己肯定感よりは少し社会性が強いものとなっておりまして、国立政策研究所のホームページを参照したところ、やはり自己有用感という言葉を推奨しておりましたので、こちらの言葉を使用しております。

青山市長　　柱１の「視点３：他者との関わり方を学ぶ教育」の、ご高齢の方、障がいのある方との関わり、災害発生時などの関わりはとても良いと思うのですが、例えば、赤ちゃんや幼稚園児、保育園児のような自分より幼い子と触れ合うことで、一人っ子のお子さんが「自分がお兄さん、お姉さんだ」と感じることで、自己有用感を結構感じられるところもあるのではないかと、自分の周りを見て思ったのですが、そのような視点は何かないでしょうか。

髙田教育指導参事　　市内の自主研修やほかの教育関連施設を訪問する中で、保育のことを学んだり体験したりする実習・勉強も行われておりまして、義務教育９年間の中でどこでどのようなことを行うかについては現在策定中ですが、市内のそういう年下の人と関わる取組も、全部の小中学校に周知して参ります。

青山市長　　幼い子との関わりというのもあって良いのかなという感想を持ちました。実際に政策をやっていくのであれば、何か書いてもいいのかなと思います。自己有用感に繋がる大切なファクターだと思いました。
　ほか、皆さんからご質問やご意見ありましたらよろしくお願いいたします。

古谷委員　　中央町近辺は周りに子どもたちが少なすぎて、何かをするにしても、お母さんたちとの関わりがないため誘いづらく、また、町会にも参加して頂きたいのですがなか

なかきっかけが掴めない現状です。お互いもっと、お年寄りたちも子どもたちと接したいのですが、なかなかそういう場面がありません。

青山市長　　柱２にあるように、地域の皆様も子どもたちや学校にもっと関わっていきたいという思いもあると思うのですが、そういう意味でコミュニティ・スクールが活性化されると、思いが実現されてくると思います。

古谷委員　　努力されていると思うのですが、あまりに中央町が年寄りの町になりすぎているものですから。

髙田教育指導参事　　地域の行事や催しに子どもたちが参加するものがあれば、小中学校で紹介して参加を促すようにしていきたいと考えております。

古谷委員　　また、統合されたので学校が遠く感じます。徒歩圏内に学校があった頃は、自分たちの卒業している学校だからということで、親御さんたちも参加したりすることはあったのですが、４校が合併してしまってから学校との関わりが少なくなってしまい、今年の夏も電信浜の当番をどうするか、どこが担うかについて問題になりました。昔はＰＴＡが見たりしてくれたのですが、今のお母様方はとても忙しいですし、かといって町会も皆年寄りしかいないので、「テントの中にいるだけでも大変」と言っておりました。そういう中でどう関わっていけばいいのか分からないところです。

西舘教育部次長　　１９日の土曜日に、室蘭西中学校の調理室を借りてロータリークラブの方が外国人の留学生の方をお招きして、中学生と交流したいというお話しがあった時に、私どもとして、出来れば町会の方やＰＴＡの方とも連携してやって頂きたいというお話しをさせて頂き、中学校と交流することになっています。コロナで活動が制限され、余計に学校が遠くなっていると皆様も感じていると思うので、これから色々な行事が出てくる中で、出来るだけ

地域の方と連携しながらやっていけるように努力し、徐々に地域の方にも認識して頂いて近い存在になって頂き、一緒に子どもを育てるという形に持っていけたらと思っております。

古谷委員　　ありがとうございます。

青山市長　　ほかにいかがでしょうか。

定廣委員　　私は民生委員もさせていただいているのですが、１２ページのところに子ども議会の中で生徒から「（地域の民生委員が）誰なのか知る機会がない。」というのを私は初めて知りました。確かに年配の方、特に６０歳以上の方のお家は、以前ほどではないですが訪問する機会はあっても子どもたちに挨拶する機会がなかったのですが、こういったことを初めて知り、子どもたちからこういう声があったというのは地域の方に是非お知らせしたいと思いました。

髙田教育指導参事　　ありがとうございます。実際に、民生委員の方に学校に来て頂き、全校集会で顔を覚えて頂いてどんなことをしているのか紹介し、その後放課後に生徒会の役員の方達と話しをするような学校がありまして、そのようなこともこれから学校でも増えるよう繋げていきたいと思います。

青山市長　　ほかにありませんか。

定廣委員　　青健協の方も蘭中地区で関わらせて頂いているのですが、やはり子どもの参加が少ないというのが毎回会議の議題になっておりまして、先日も青健協のイベントは学校の協力をもらいプリントを配らせて頂いたのですが、こういう形でしっかり文章になっていると、これからも協力体制を深めていけるようになるので良いと思います。

髙田教育指導参事　　今まで以上に地域とより一体となって進めていきたいと考えておりますので、学校運営協議会の方にも青健協の方がいらっしゃることから、協力して今まで以上に子どもたちにも伝えていきたいと思います。

定廣委員　　ありがとうございます。

青山市長　　ありがとうございます。ほかにいかがですか。ないようでしたら、本日の協議事項を終了し、進行を事務局に返します。

坂口教育部長　　ありがとうございました。今回様々な意見を頂きましたので、精査しながら内容の良いものに差し替えていきたいと思います。これをもちまして、令和４年度第３回総合教育会議を終了いたします。本日は、ありがとうございました。